

特別講演

講演題目

「東京オリンピック・パラリンピック 開催にむけた体育への期待」

講師：真 田 久



現在の職名・委員名等（平成27年10月現在）

- ・東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 参与
- ・同組織委員会 文化・教育委員会委員
- ・同組織委員会 大学連携検討会委員長
- ・東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議座長
- ・文部科学省オリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議委員
- ・日本オリンピック・アカデミー副会長
- ・嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター理事長
- ・つくば国際スポーツアカデミー長

〈略歴〉

昭和30年12月東京生まれ。

筑波大学体育専門学群卒業，同大学院体育研究科修了。

現在，筑波大学体育系教授。平成24年より体育専門学群長。

博士（人間科学）。

古代および近現代のオリンピック競技会や嘉納治五郎に関する歴史人類学的研究に従事。

平成22年設立のIOC公認「筑波大学オリンピック教育プラットフォーム」事務局長として，附属学校11校とともにオリンピック・パラリンピック教育の実践に携わる。

【MEMO】

幼稚園部会



三滝寺 鐘楼

「写真提供：広島県」

第 1 分科会

研究主題

自分の体に関心を持ち、

体を動かすことが大好きな幼児の育成

広島市立山本幼稚園

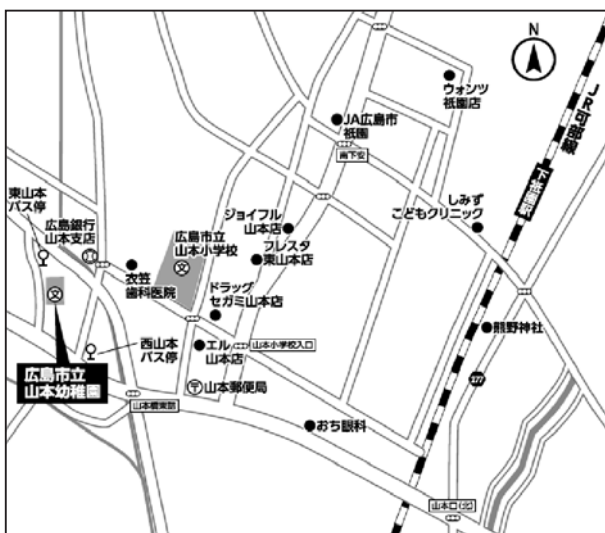
日 程

9:30	10:00	11:30	12:00	13:00	13:15	14:20	14:50	15:00
受 付	公 開 保 育	ア ト ラ ク シ ョ ン	昼 食	開 会 行 事	研 究 協 議	研 究 発 表	指 導 講 評	

公開保育案内

学 年	組 名	保 育 内 容	場 所
4 歳児	ゆり・ばら	友だちや親子で楽しむ活動	園 庭
5 歳児	もみじ・あやめ		

幼稚園所在地



交通機関

- ☆広島交通バス
 - ・東山本から徒歩 1 分
- ☆JR可部線
 - ・安芸長束駅から徒歩15分

広島市立山本幼稚園



所在地：〒731-0134 広島市安佐南区山本4丁目12-4

連絡先：TEL：(082)874-3570 FAX：(082)874-3570

E-mail：yamamoto-k@e.city.hiroshima.jp

園長：井筒敦子

園児数：130名

◎教育目標

心豊かで、たくましく生きる 子どもの育成

- ・やさしい子
- ・がんばる子
- ・かんがえる子

◎園紹介

本園は、広島市の中心部から15キロほど北西に位置し、周りには武田山や山本川等の豊かな自然に恵まれる一方で、近年急速に都市化が進み、山手には大きな新興住宅地ができ、人口も増加している。核家族が多く、転勤での出入りも多い地域である。

本園は、昭和28年山本地区山本保育園として開設された。昭和47年の広島市との合併により、広島市立山本幼稚園となり、本年創立47年を迎える。

平成20・21年度文部科学省委託事業「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」から引き続き、心身ともにたくましい子供たちを育てていくことをめざし、教育の推進を図っている。

1 研究の構想

(1) 研究主題

自分の体に関心をもち、体を動かすことが大好きな幼児の育成
～友だち・親子でかかわり合う運動遊びを通して～

(2) 研究主題設定の理由

本園周辺は近年大型商業施設や大規模団地の開発が進み、幼児を取り巻く環境が大きく変化している。普段の生活では自動車や自転車の利用が多く、少し歩くとすぐしゃがみ込む、遊び仲間に入れないなどの様子が見られる。生活リズムの課題や戸外で体を動かしたり、子供同士が一緒に遊んだりする経験が少ないことが要因の一つと考えられる。

幼児は体を動かしたい、友だちと一緒に遊びたいという気持ちをもっている。体を動かしながら友だちとかかわり合う中で楽しさを共有し、刺激を受けたり、認め合ったりしながら運動への動機をより高めていく。そして、自分の気持ちと相手の気持ちとの折り合いをつける自己調整力や協調性、コミュニケーション能力の基礎も獲得していく。

体づくりの基本となる生活リズムや食生活を整えるためには、保護者との連携が不可欠であり、親子での共通体験は、子供が自分の体に関心をもつことにつながると考える。また、親子で一緒に体を動かして肌と肌が触れ合うことは心の安定につながり、保護者に認められることで、自信につながると考えた。

そこで本園は、広島市立幼稚園「体力づくりプロジェクト研究会」と連携を図りながら、友だちや親子でかかわり合う運動遊びを通して、自分の体に関心をもち、体を動かすことが大好きな幼児の育成をめざし、環境の構成や教師の援助について研究を推進していくこととした。

(3) 研究の仮説

友だちや親子でかかわり合い、楽しみながら体を動かすことができる環境構成、援助の工夫や、保護者と連携した元気な体づくりへの取組により、幼児は自分の体に関心をもち、体を動かすことが大好きになるのではないかと考えた。

2 研究内容

(1) 発達段階を踏まえた指導と評価

ア 幼児の興味や関心、発達段階を踏まえた運動遊びの指導計画の作成

イ 幼児期の発達の特性を踏まえた評価

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 友だちとかかわり合いながら、体を動かして楽しく遊ぶための教師の援助と環境構成

イ 親子でかかわり合いながら、体を動かす楽しさを味わうための活動内容の工夫

(3) 自分の体に関心をもつようになるための指導

ア 家庭と連携した元気な体づくりの取組

3 実践事例

(1) 発達段階を踏まえた指導と評価（一部抜粋，別資料）

3 実践事例

(1) 発達段階を踏まえた指導と評価（一部抜粋，別資料）

平成27年度 運動遊び年間計画				
	4月	5月	6月	7月
ねらい	【4歳児】◎先生や友達と一緒にいろいろな遊具や体を動かす遊びを楽しむ。 【5歳児】◎友達と一緒にいろいろな遊具や運動遊びに導入で取り組み、楽しさを味わう。			
げんき	【体操】・どうぶつ体操 ④スタンバイ、挨拶、退席、並びっこ、行進、早歩き、大股歩き すべりだい、フランク	【模倣遊び】 ④ワニ、アヒル、カエル、犬 【新聞紙】④三匹の子豚 ジャングルジム、うんてい	【跳ぶ】 ④トランポリンマット ドレミマット ジャンプフープ	【かえるの体操】 ④トランポリン、ドレミ、積み木、フープ、縄跳び
含めたい遊び	【離れ合い遊び】 ・わすんでひらいて ・ロボット歩き	【バランス】 ・ひこうき ・背巾すべりだい 【親子体操】・ふたりでできること クロススキップの歌	【ジャンプ】 ・ハイスカッチ ・ロケットジャンプ	
評価	◎自分のやりたい遊びに導入で参加しているか。 ◎友達と一緒に遊ぶことを楽しんでいるか。 ◎友達と協力しながら遊ぶことを楽しんでいるか。 ◎いろいろな遊具や用具に触れながら、遊びを楽しんでいるか。			

ア 幼児の興味や関心，発達段階を踏まえた運動遊びの指導計画の作成
遊びを通して様々な動きを経験できるよう，幼児の興味や関心，発達段階を踏まえ，また，地域の環境や保護者との連携を生かして運動遊びの年間指導計画を作成した。

イ 幼児期の発達の特徴を踏まえた評価
幼稚園教育の評価は，幼児の姿から，一人一人の育ちや活動の意味を読み取り，理解していくことである。幼児を理解する視点と，教師の援助や環境双方の視点を持ち，遊びの過程で情報を交換したり，記録をもとに職員間で話し合いをしたりしながら評価した。

(2) 運動への関心や意欲を高め，自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 友だちとかかわり合いながら，体を動かして楽しく遊ぶための教師の援助と環境構成

事例1「鬼は外～」2月 4歳児
(共通のイメージをもち，友だちとかかわりながら一緒に体を動かすことを楽しんだ実践)



(事例の背景)

節分の行事で，新聞紙を丸めたボールを使って豆まきを楽しんだ。その後，園庭に出て，新聞ボールを投げて遊び始めた。

幼児の姿	○教師の読み取り◎援助や環境の工夫
- 牛乳パックや段ボールを台に並べて的あてをする。 「こうしてみよう。」「ここに置いて。」などと友だち同士で相談しながら，上に積み上げたり，並べたりした。 「絵を描きたい。」「鬼にしようよ。」などの思いや発言がでてきた。 - 遊びに加わる子供の人数が増え，活気が出てきた。会話も活発になる。 - しばらくすると，並べたらすぐに倒したい，みんなで同時に投げて競争をしたいなど，思い思いの遊び方になってきた。	○節分の行事の中で，豆まきをしたことが印象に残ったのだろう。この共通の体験は，これからの遊びの中に生かせるのではないかな。繰り返し投げて遊ぶことも期待できる。 ◎友だちと一緒に考えを出し合ったり，工夫したりしながら遊びの内容を豊かにしていくことを願い，子供にも扱いやすい，牛乳パックや段ボールを的として用意した。 ○段ボールは子供の力でも扱いやすい重さで，積み上げたり並べたりしながら，友だちと一緒に考えながら形を作っていくことができた。また，形や大きさの変化がわかりやすく，周りにいる子供の興味を引くものとなった。 ○高く大きく積み上げた段ボールで遊んでいるうちに，節分の行事で，鬼に新聞ボールを投げたことを思い出したのだろう。 ◎鬼のイメージを引き出しながら，幼児と一緒に鬼の絵を描いた。豆まきを経験し共通のイメージがあったが，絵に表現したことでより友だちとのイメージが共有化された。一緒に絵を描いたことで，「自分たちの遊び」という思いも強くなってきた。 ○遊びのルールが子供たちの中からうまれようとしているが，人数が増えた分，思いや遊び方が行き違い，トラブルが起きている。 ○思いはそれぞれに違っているが，友だちと一緒に遊びたいという思いが強く感じられた。

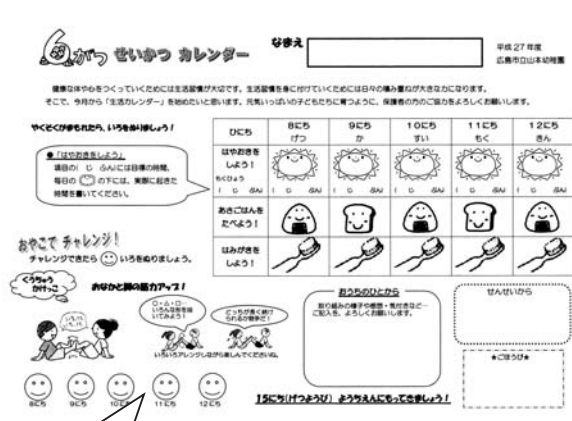
・自分たちで相談して、ルールを決めたり、投げ始めの位置を白線で引き始めたりした。	それを生かすためには、教師がそれぞれの思いや遊びを調整していくことが必要であると考えた。 ◎互いの思いを引き出し、気付かせるよう援助した。折り合いをつける助けとなることを願い、日頃から他の遊びで使っていた判定旗やライン引きを用意した。
言平 仁田 観点：★進んで体を動かして遊んでいたか。（投げる遊びを楽しんでいたか。） ★幼児 ★友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わっていたか。 ☆教師 ☆友だちと考えたり工夫したりしながら、楽しく体を動かして遊べる活動内容や教材の工夫はできていたか。	
幼児の姿から	教師の援助と環境構成
・遊びの楽しさから、繰り返し投げて遊んでいた。的が変化することで、的をねらうという意識をもち、投げる力を調整する体験をしている。 ・「節分」の行事に参加した後の遊びであることから、鬼に豆を投げるといった共通のイメージをもちやすく、多くの幼児が遊びに入っていた。 ・友だちと自分の思いを出しながら、互いの思いの折り合いをつけ、かかわりながら一緒に遊びを進めていく楽しさを感じていた。自分たちで遊び方を考えて進めていく実感をもつことができた。	・この時期ならではの行事と幼児の日常の経験をタイミングよくつなげていくことができ、投げることを中心に寒い時期の運動量を確保できた。 ・「こんな風に遊びたい。」という思いを具現化できる素材を、かかわり合う様子を見ながら用意することができた。いろいろな重さや質感等があり、手応えを感じつつも扱いやすかったことで、友だちと自然に会話を交わし、かかわりをもつようになったのではないかと感じた。素材が視覚、体感に訴えるものだったことで一緒に遊ぶ楽しさが幼児に強く実感できた。 ・判定旗やライン引きを用意したことで、互いの思いに折り合いをつけてルールを共有できた。目には見えない思いやルールをわかりやすくしたと思われる。子供たちから生まれた共通のルールは、この時期の子供の育ちに応え、遊びを持続させ、体を動かす楽しさを高めるものとなった。

イ 親子でかかわり合いながら、体を動かす楽しさを味わうための活動内容の工夫

(事例の背景)	
教師が抱き上げると自分の体重を預けることができない、体を反らせる、わらべうたや手遊びをしたことがないなどの子供の姿がある。 また、保護者アンケートからは、「親子で体を動かす時間・経験が少ない。」「どのように一緒に遊んでよいのかわからない。」など、親子での運動遊びの経験が少ないという結果があった。	
活動内容	実践からわかったこと
親子でチャレンジ ・生活リズムカレンダーの取組を年間（5日間）行い、毎回親子でチャレンジの項目を設けた。主に体格差を利用した遊びとした。	・特別な道具を使わなくても体を動かして楽しめる遊びや、リズムに合わせて触れ合う遊びを紹介することができた。繰り返し家庭で遊ぶ様子が見られ、体を動かす楽しさを家庭に広げることができた。 ・親子で体を触れ合って遊ぶことは、幼児の心の安定につながる。この心の安定は、運動遊びへの意欲の大きな支えになっていると思われる。
親子触れ合い遊び ・月例の参観日に、リズムに合わせる親子触れ合い遊びを紹介し、一緒に行う。	・昔ながらの遊びを保護者に紹介したことで、保護者は遊びを思い出し、幼児とともに一緒に触れ合う心地よさを感じることができた。また、教師は、教材として遊びを見直し、活用するきっかけとなった。
園庭開放 ・毎日降園後、14：00～15：00 園庭開放を行う。	・幼児が保護者にその日できるようになったことを伝え、その喜びを共有することや、幼児の「できるようになりたい。」という思いを保護者が支える機会となった。それを継続したことで、幼児の運動への動機や挑戦意欲をより高めた。

(3) 自分の体に関心をもつようになるための指導

ア 家庭と連携した元気な体づくりの取組



(ア) 生活リズムカレンダーの取組
生活リズムカレンダーの中で、「早寝・早起き・朝うんち」の項目を設けることで、保護者も子供も意識して取り組み、その結果、改善されることが多く、生活リズムの大切さを保護者が気付くきっかけとなった。

(イ) 食育指導

親子での野菜の栽培を中心に、自分たちで育て収穫することを通して、食に対する関心が高まった。食育集会では、自分たちが食べたものの行方や栄養について視覚教材を活用して指導した。食べて力になることを意識し、苦手だった野菜を食べようとしたり、朝ご飯を意識したりするなど食に関する関心が高まった。

4 研究のまとめ

(1) 成果

- 運動遊びの年間計画を作成し、幼児の実態に合わせながら環境構成や援助の工夫をしていくことで、幼児自身が喜んで体を動かし、いろいろな運動遊びに自分なりのめあてをもって意欲的に取り組むようになっていく。
- リレーのメンバーを探して友だちを誘ったり、一輪車の練習をしている友だちの手を持って支えたりなど進んでかかわろうとする姿や、負けて一緒に悔しがったり、雲梯を渡りきった友だちに駆け寄って喜んだりなどの姿もある。また、園に慣れず、体を硬くしていた幼児が、友だちの動きに誘われて追いかかけ合い、思わず表情を崩して、これをきっかけに体を動かして遊ぶようになり、日に日に表情が明るくなった事例もある。友だちとかかわる楽しさは、子供の心と体を躍動させ、運動への意欲に大きくかかわっていることを再確認した。その中で、運動機能の発達だけでなく、相手の体温や息づかいを感じる、目と目を合わせる喜びや楽しさ、時には不安や悔しさも共有するなどたくさんの情緒的な経験をし、一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを感じていることがわかった。
- 保護者が生活リズムや運動の大切さに気付き、改善しようとする意識をもつことができた。幼児自身も早寝早起きなど生活リズムを意識する会話が聞かれるようになった。また、親子の触れ合い遊びで、体を動かす環境がより身近になっている。

(2) 課題

- 発達の個人差、興味・関心をより理解し、個々に応じた環境構成やきめ細かい援助について考えていきたい。また、心の育ちを大切にしながら、友だちとのかかわり合いの中で幼児相互の有能感を高めるような教師の援助について、今後も取り組んでいきたい。
- 体を動かす習慣は、家庭での取組や生活の仕方が大きくかかわっている。地域の実態や家庭教育力をより有効に活用できるような援助について探していきたい。

第2分科会

研究主題

自分の体に関心を持ち、

体を動かすことが大好きな幼児の育成

広島市立基町幼稚園

日程

9:30	10:00	11:30	12:00	13:00	13:15	14:20	14:50	15:00
受付	公開保育	アトラクション	昼食	開会行事	研究発表	研究協議	指導講評	閉会行事

公開保育案内

学年	組名	保育内容	場所
3歳児	はな	体を十分に動かす活動	園庭・保育室ホール
4歳児	つき		
5歳児	ほし		

幼稚園所在地



交通機関

- ☆アストラムライン
 - ・城北駅から徒歩5分
- ☆JR山陽本線
 - ・新白島駅から徒歩10分

広島市立基町幼稚園



所在地：〒730-0011 広島市中区基町20－3

連絡先：TEL：(082)228-3888 FAX：(082)228-3888

E-mail：motomachi-k@e.city.hiroshima.jp

園長：南 直子

園児数：57名

◎教育目標

明るくのびのびとした基町幼稚園の子ども

- ・元気な子ども
- ・がんばる子ども
- ・やさしい子ども

◎園紹介

本園は、広島市の中心部に位置しており、近くには、中央公園、城趾公園、平和公園などがあり、緑豊かな自然環境に恵まれている。こども文化科学館や美術館、図書館などの文化施設も多く、子供たちの日常の保育には、こうした地域の環境を大いに活用して体験活動に取り入れている。中心部の唯一の市立幼稚園であるため、子供たちは東区、西区、南区など、広範囲から通園している。

本園は、昭和49年に被爆後の広島復興の証として再開発された高層住宅の建築に伴い設立された。平和や命の尊さを子供たちの心に育て、広島の平和への願いを継承していく子供たちを育てていくことをめざし教育の推進を図っている。

1 研究の構想

(1) 研究主題

自分の体に関心をもち、体を動かすことが大好きな幼児の育成
～体を十分に動かして遊ぶための環境の工夫を通して～

(2) 研究主題設定の理由

本園は広島市中心部に位置しており、約85%の園児が学校区外の広範囲な地区から車や自転車で通園しており、登降園の実態から運動の基本である「歩く」ことが少ない。また、入園までの子供たちの生活体験においても戸外遊びが少なく、入園当初は、動きがぎこちない子供、姿勢が保てない子供、室内遊びを好む子供の姿が多く見られる。

そこで、広島市立幼稚園「体力づくりプロジェクト研究会」と連携を図りながら、本園の園庭やホールなどの場や様々な遊具などを生かし、幼児がいろいろな動きを楽しみながら体を十分に動かして遊ぶことができる環境を工夫し、構成することを通して体を動かすことが大好きな子供を育てていきたいと考えた。

(3) 研究の仮説

幼児がいろいろな動きを楽しみながら体を十分に動かして遊ぶことができる環境を幼児の発達段階に応じて構成することにより、幼児は自分の体に関心をもち、楽しく体を動かして遊び、体を動かすことが好きになるのではないかと考えた。

2 研究内容

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 動きの系統性を踏まえた指導と評価の計画の作成

走る・跳ぶ・投げるなどの多様な動きが経験できる、「運動遊びに関する年間指導計画」の作成

(2) 運動への関心や意欲を高める環境構成

ア 五つの視点に基づいた環境構成

イ 年間を通して体を動かして遊べる環境構成

ウ 多様な動きのバリエーションが楽しめる環境構成

(3) 自分の体に関心をもつための指導

ア 生活リズムを身に付けるための家庭との連携

イ 体の部位を意識して動かす活動の実践

3 実践事例

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 動きの系統性を踏まえた指導と評価の計画の作成

3・4・5歳児の発達の段階に応じて多様な動きが経験できる様々な遊びを取り入れるために、「運動遊びに関する年間指導計画」を作成し、実践した。

表 運動遊びに関する年間指導計画

運動遊びに関する年間指導計画				
学年	3 歳			
期	I期(4・5月)	II期(6・7月)	III期(8・10月)	IV期(11・12月)
ねらい	○先生と一緒に体を動かす心地よさを味わう。	○先生や友達と触れ合いながら体を動かすことを楽しむ。	○先生や友達と一緒に体を動かすことを楽しむ。	○いろいろな道具を使った遊びを楽しむ。
基本の動き	共通の体操 動物体操 にこにこわくわく体操 ダンスリトルバード など だよボールだよ バルーン 虹色のバレード 誕生月仲間 手裏剣忍び			
活動	走る よける 止まる	動物の表現 鬼ごっこ	追いかけっこ ひっこし	しっぽ お宝探し
歩く	園外散歩 中央公園(花見) 広島城(こいのぼり見学) 小学校			
環境構成と援助のポイント	・安心して過ごせる場 や戸外で遊ぶ時間を確保し、心ゆくまで遊べるようにする。	・保育室の中に、平 均台やマットなどを設 置し、教師と一緒に楽 しめるようにする。	・走りまわったり、3歳 児が楽しめるようなり ずみの曲で思いきり 踊ったりできるように する。	・4・5 歳児が楽しめるよう に、み合いながら 遊ぶ。
評価	・自分なりに体を動か していたか。	・戸外で遊ぶ心地よ さを感じていたか。	・先生や友達と体を 動かして遊ぶことを楽 しんでいたか。	・いろいろな 道具を使って遊 んでいたか。

ねらい・環境構成と援助のポイント・評価を期ごとに明確にし、反省と評価を行いながら環境の構成に生かした。

「体のバランスをとる動き」回る・転がる・渡る・ぶら下がるなど、「体を移動する動き」歩く・走る・登る・はう・よける・滑るなど、「用具などを操作する動き」運ぶ・投げる・捕る・転がす・蹴るなどの動きが遊びの中で経験できるようにした。

(2) 運動への関心や意欲を高める環境構成

発達の段階に応じて運動の楽しさや喜びが味わえるよう環境と指導方法を工夫した。

ア 五つの視点に基づいた環境構成の事例

五つの視点(AからE)を基に環境を構成し関心や意欲が高まるようにした。

A：生活の中での環境づくり



<ケンパの道>

教師の援助

日頃の生活の中で、いつでも体を動かして遊べるようにする。

保育室を移動する時、活動の合間などにも遊ぶ姿が見られた。

C：挑戦意欲を高める環境づくり



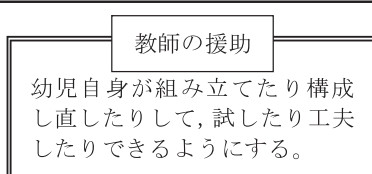
<うんてい>

教師の援助

目標をもったり達成感を味わったりできるようにする。

雲梯の番号を意識して、目標をもって取り組む姿が見られた。

B：繰り返し体験できる環境づくり



教師の援助

幼児自身が組み立てたり構成し直したりして、試したり工夫したりできるようにする。

段ボールの的にボールを当てて倒し、いろいろな積み方を考えたり試したりして遊ぶ姿が見られた。



<ボール投げ>

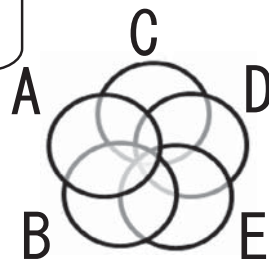
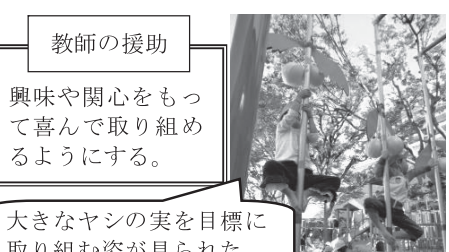


図 体を動かして遊ぶ活動の環境づくりの視点

D：思わずやってみたくなる環境づくり



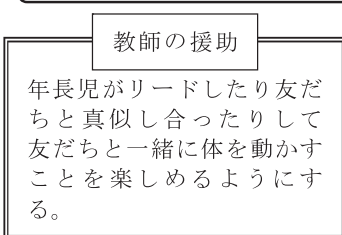
教師の援助

興味や関心をもって喜んで取り組めるようにする。

大きなヤシの実を目標に取り組む姿が見られた。

<登り棒>

E：友だちと一緒に楽しめる環境づくり



教師の援助

年長児がリードしたり友だちと真似し合ったりして友だちと一緒に体を動かすことを楽しめるようにする。



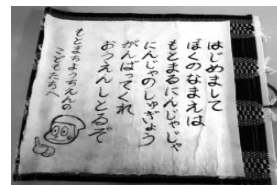
<触れ合い遊び>

イ 年間を通して体を動かして遊べる環境構成の事例

学年の発達段階・幼児の実態に応じて、巧技台・マット・跳び箱・平均台・鉄棒などの遊具を組み替えながら常時設置し、年間を通し継続して遊びながら様々な動きが楽しめるようにした。

○事例「忍者の修行をしよう」

遊具の種類や配置・高さなどを変え学年に応じて様々な遊び方ができるようにした。



3歳児 よじ登る



4歳児 梯子を渡る



5歳児 梯子・跳び箱の枠を歩く



「忍者の修行をしよう!」と、継続して遊ぶことにより、いろいろな動きがスムーズになったりできるようになったりし、自分のやりたい修行を何度も楽しむ姿が見られた。

ウ 多様な動きのバリエーションが楽しめる環境構成の事例

○事例「投げて遊ぼう」

投げる物（新聞ボール・布・まり・テニスボール・お手玉・ドッジビーなど）、的（柵・ネット・段ボール・かごなど）の種類、遊び方（競うなど）を変えることにより、投げ方・方向・強さなど多様な動きのバリエーションを楽しみながら遊ぶことができるようにした。



何個入るかな



テニスボールが当たると紙皿（的）が揺れ、自分なりに投げる位置を決め、目標をもって遊ぶ姿が見られた。



新聞ボールをチームごとに競争して投げ合い、何度も拾って投げたり遠くに投げるとよいことに気付いたりして遊ぶ姿が見られた。



忍者になりきって手裏剣に新聞ボールを当てたり、柵の向こうの友だちに投げたりして遊ぶ姿が見られた。

（3）自分の体に関心をもつための指導

ア 体の部位を意識して動かす活動の実践事例（子供ヨガ）

子供ヨガをクラスの活動に取り入れ、指先や足先・背筋などを伸ばすことを意識したり、友だちと気持ちを合わせながら体を動かしたりした。

日常の生活の中でも、足を揃えて立つ、かかとを上げて歩く、指先を伸ばす、口を閉じて鼻で深呼吸をする、自分の足の裏をマッサージする活動を取り入れ、自分の体の部分を意識しながら行動できるようにした。



指先と背筋をまっすぐ伸ばし、ゆっくり呼吸をすることを意識して動く姿が見られた。



自分の足を持ち、温かさや冷たさを感じることができた。足を自分でマッサージする心地よさを感じることができた。



友だちと一緒に足の裏を合わせ、バランスをとることで、自分の体と友だちの体を意識して気持ちを合わせて動く姿が見られた。

イ 生活リズムを身に付けるための家庭との連携

「早寝・早起き・朝ごはん・朝うんち」の取組を家庭と連携して行うことにより、食えること、寝ること、朝排便することが健康な体をつくり、体に関心をもつことにつながると考えた。一方法として、「排便カレンダー」を作成し、毎朝トイレに座ることを意識し、習慣が身に付くようにした。



排便カレンダー

表 月別排便日数表

月ごとに朝排便した日数を色塗りし、振り返りができるようにした。

「排便カレンダー」に記入された保護者の感想から

- ・ 朝起きてすぐ、トイレに行く習慣が付きました。幼稚園に行き始めてきちんと出るようになりよかったです。うんちが出たら「にっこり笑顔を描いて～」と笑顔で催促してきます。
- ・ 今月も全部のうんちくんがトイレで座ってできました。お尻を拭くのも上手になりました。
- ・ もっと早く起きて、トイレに座れるように頑張っていこうと思いました。

4 研究のまとめ

(1) 成果

- 五つの視点を基に、体を動かして多様な動きが楽しめる遊びができるよう環境の構成を行ってきた。運動への関心や意欲が見られ、いろいろな動きを楽しみながら遊ぶ姿が見られた。また、自分もできるという満足感や充実感を味わう姿も見られた。
- 常時、体を動かして遊ぶことができる環境をホールに構成し、「忍者の修行」と称して幼児の遊びのイメージを高めたことにより、日常生活の中で幼児が忍者になって継続して遊ぶ姿が見られた。また、学年や幼児の実態に応じて、環境を再構成することにより、全身を思い切り動かしたり様々な動きがスムーズにできるようになったりする姿が見られた。

(2) 課題

- 運動的な遊びに苦手意識をもつ幼児、静的な遊びの方に関心をもつ幼児が、楽しみながら遊ぶことができる援助や環境の在り方について、考えていきたい。

広島市立幼稚園「体力づくりプロジェクト研究会」について

広島市立幼稚園では、山本幼稚園が平成20・21年度文部科学省委託事業「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」を受け、幼児期の心や体のたくましさをはぐくむために「みんなでチャレンジ123」「じょうぶな体づくり」「親子でチャレンジ」の3つの視点に沿って研究を行った。

平成25年度には、広島市立幼稚園全園で「体力づくりプロジェクト研究会」を立ち上げた。全19園で課題を共有して統一主題の基で基本的な運動能力である「走」「跳」「投」の実践を持ち寄り、研究を進め今年度3年目を迎えた。「体力づくりプロジェクト研究会」の研究内容は次の通りである。

1 研究の構想

(1) 研究主題

自分の体に関心を持ち、体を動かすことが大好きな幼児の育成

(2) 研究主題設定の理由

近年、核家族化・情報化による子供たちを取り巻く社会の変化は著しく、幼児の発達に様々な影響を及ぼしている。地域や家庭において、子供同士で集って遊ぶ経験の減少、戸外で遊ぶ経験の減少などにより、コミュニケーション能力や体力の低下が、広島市においても見られる。体力面からは、動きがぎこちない、持続力がない、けがが多い、すぐに「疲れた。」と言うなどの実態があげられる。

平成24年に「幼児期運動指針」が策定され、「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる。」と示されている。

本研究大会においては、「わかる・できる・かかわり合う体育学習」を受け、幼稚園においては、遊びを通して、体を動かすことの楽しさを十分に味わわせることが、豊かな人生を送るための基盤づくりにつながると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究の仮説

友達と一緒に多様な動きを経験できる遊びの工夫や、十分に体を動かして活動できる環境構成を工夫することにより、体を動かすことが大好きになることにつながるのではないかと。

また、その多様な動きは、幼児の運動機能や能力の発達を「走」「跳」「投」の3つの視点から捉えることで、環境構成や指導の工夫の手がかりとなるのではないかと。

2 研究内容

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 発達段階を踏まえた指導計画の作成

イ 幼児の発達を踏まえた評価の工夫

(2) 「走」「跳」「投」における指導方法の工夫

3 実践内容

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

「走」「跳」「投」の動きを中心とした遊びと環境構成、評価を踏まえた指導計画を作成する。

ア 発達段階を踏まえた指導計画の作成（別紙参照）

表1 「走」「跳」「投」を中心とした指導計画

広島市立幼稚園 走・跳・投 年間指導計画										平成27年度	
1学期			2学期			3学期			4学期		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる			走る		
走る			跳ぶ			投げる					

(2)「走」「跳」「投」における指導方法の工夫

ア 「走」における指導方法の工夫

- 「走」における幼児の実態
 - ・ 遊びや生活の中で、楽しいことや嬉しいことがあると、思わず走り出す。
 - ・ 友だちや先生と一緒に走ったり競争したりすると、走ることが楽しくなる。
 - ・ 走ることが好きでない幼児は、走る要素のある遊びにかかわろうとせず、遊びの中で走る経験が少ない傾向にある。
 - ・ 思い切り走る空間・仲間・時間の減少や車での移動が増えたことなど社会環境や生活様式の変化から、歩いたり走ったりする経験が少ない。
 - ・ 乳幼児期の全身の発達が著しい時期に、発達段階に応じた必要な経験が不足している。(四つん這い、這う、親指の蹴り、踵の力、座位など)
- 幼児にとっての「走」とは
 - ・ 走ることにより“心地よさ”や“楽しさ”を味わうことができ、友だちと一緒に走ったり競ったりするとより楽しくなる動きである。
 - ・ 心弾ませる環境(もの・こと)にかかわり遊ぶことで、楽しさが増し、体が弾み、生き生きとする動きである。
 - ・ 走りたいという気持ちが高まるのが、鬼ごっこや集団遊びなどで活発に体を動かすことにつながる。
 - ・ ルールのある遊びや集団遊びで、自分なりの目当てをもつことで、より活発な動きにつながる。
 - ・ 繰り返し走ることによりしなやかな体の動きが獲得でき、調整力や体の支持力も身についてくるバランスのとれた全身運動である。
 - ・ 俊敏になり、安全な行動をとることができるようになる。(危険回避、状況判断)
- 「走る」ことが好きになるためには
 - 次の三つの視点に基づいた環境構成や援助をしていくことが必要である。
 - ・ 『走る』ことにつながる動きを楽しむことができるようにする。(生活の中で・繰り返し・挑戦意欲を高める)
 - ・ 友だちと一緒に走ることを楽しむ。
 - ・ 思わず走りたくなる環境にかかわる。(『走る』への導入)

幼児が走る楽しさを味わう経験を積み重ねることにより、体のバランスがとれ、しなやかな動きが身に付き、さらに意欲が高まると考える。

「走・事例 思わず『走る』」

風船を持って走ろう！ 4歳児 5月

~~~~~ わかる  
===== できる  
----- かかわり合う

| 幼児の姿                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 環境構成・教師の援助                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 広告や色紙の短冊を小さく切ったものをビニール袋に入れて、自分の風船を作った。</li> <li>○ 風船を飛ばしたり手で打ったりすることを十分に楽しんだ。</li> <li>○ 風船を使って色々な動きを試すようになった。</li> <li>○ 風船の紐を持って、園庭のトラックに沿って喜んで走った。</li> <li>○ <u>速く走ると風船が上がり、ゆっくり走ると下がることに気づき、何度も繰り返し走った。</u></li> <li>○ 自分のペースで走ったり休んだりしながら友だちと一緒に満足いくまで楽しんだ。</li> <li>○ <u>友だちの姿をみて、やりたくなった幼児も風船に紐をつけて走り出した。</u></li> <li>○ <u>トラックラインに沿って、力一杯走り始めた。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の作ったものの愛着をもって遊んだことで満足感を感じていたので、走ることに興味がもてるように、教師が風船に紐をつけた。</li> <li>○ 外に誘い、思い切り走ることや場や時間の保障をした。</li> <li>○ 幼児が楽しいと感じていることに共感した。</li> <li>○ 友だちの様子を見たり、遊びの途中で休んだりできるようにベンチを置いた。</li> <li>○ 走ることに興味がなかった幼児のやりたい気持ちを受け止め、教師も一緒に走って楽しさを共有した。</li> </ul> |

## 【ビニール風船】

いくぞ～！



わあ～、うかんだよ！



すご～い！

### ○ 取組から

- ・ 幼児は風船が様々な動きをすることに興味をもち、思わず走り始めた。遊びの楽しさを味わうことが繰り返し試し、走ることに繋がった。
- ・ 走ることに興味がなかった幼児も、友だちの姿をみて関心をもち一緒に走り出す姿が見られ喜んで走る幼児が増えた。
- ・ 幼児は教師や友だちと体験を共有し共感し合うことで遊びがより楽しくなり、喜んで一緒に走る姿がみられた。
- ・ 幼児の思いや願いを捉え、実現するために必要な環境の再構成を図ると、遊びがより楽しくなったり発展したりすることがわかった。
- ・ 幼児が満足いくまで走って遊ぶことができる時間と場の保障が必要である。

## Ⅱ 「跳」における指導方法の工夫

### ○ 「跳」における幼児の実態

- ・ 嬉しい時や楽しい時、ワクワクする時などに跳びはねることで気持ちを表し、ダンスや体操、縄跳びなど、リズムに合わせて跳ぶことを楽しんでいる。
- ・ 続けて跳ぶ、跳び越える、目的に向かって跳ぶ、跳び下りるなどは、挑戦意欲をかき立てる身近な環境の中で幼児の自然な姿として見られる。
- ・ 友だちの様子を見たり跳び方を教え合ったりしながら、一緒に遊ぶ事を楽しむ。
- ・ 発達段階や経験の差により、両足跳びや片足跳びなどが難しい、動きがぎこちないなどの姿が見られることがある。
- ・ 安全な遊び場の減少により制約を受け思い切り跳ぶことが少なくなっている。

### ○ 幼児にとっての「跳」とは

- ・ 全身を使い、バランスのとれた体づくりのための大きな要素となる動きであり（腕の振り、膝の屈伸、リズム感、など）、身近な環境にかかわって思わず跳んでみたり、リズムに合わせて踊ったりすることで楽しさを感じ、開放感を味わうことができる。
- ・ 跳び越える、目標物に向かって跳ぶ、跳び下りるなどの動きでは状況判断や予測を行い、遊びを通して思考・判断する経験している。
- ・ 難易度が高くなるとスリルを感じ、適切な目標を示すことで挑戦意欲が高まる。
- ・ 友だちと一緒に跳ぶことで刺激を受け合い、コツを掴んだり、新しい遊びを創り出したりしながら、より楽しさが増す動きである。

### ○ 「跳ぶ」ことが好きになるためには

「跳ぶ」活動には、跳びはねる、跳び越える、跳び下りるの自然な動きや、両足跳び、片足跳び、連続跳びなどの目当てをもって行う動きがある。様々な動きを楽しみながら遊ぶようになるためには、幼児の発達段階や実態に沿って柔軟に対応していく環境構成や、援助が必要であると考えられる。「思わずやってみたくなる」、「挑戦意欲をかき立てられる」様な環境を工夫し、繰り返し遊ぶことができる時間の保障をすることが必要であるとする。また、幼児の心の変容に沿った実現しやすい課題を設定し「心を揺さぶる」、「変容を評価する」、「気持ちに共感する」などの言葉掛けを工夫することが、幼児が繰り返し活動したり、挑戦したりする姿につながると考える。



「跳・事例 イメージをもって『跳ぶ』」

忍者修行（サーキット遊び）全園児（4歳児・5歳児） 6月

~~~~~ わかる  
===== できる
----- かかわり合う

| 幼児の姿 | 環境構成・教師の援助 |
|---|---|
| <p>家の人と一緒に忍者修行をすることを伝えると親子で<u>嬉しそう</u>に相談を始めた。
「忍者修行のサーキット」</p> <p>○ 忍者になりきり得意の技を家の人に見てもらおうとはりきっていた。
「石跳びの術」
「ひらりの術」 など</p> <p>○ 「石跳びの術」では、すばやく石を跳び越えようと、体の動かし方を<u>工夫</u>していた。</p> <p>○ 「ひらりの術」で、4歳児は5歳児が思い切り跳んでいる姿に刺激を受け<u>模倣</u>しようとしていた。</p> <p>○ リズミカルに跳んで忍者を表現しようとする姿を認めたことで、普段活動が持続しにくい幼児が、体の動かし方を考えながら<u>繰り返し挑戦する姿</u>が見られた。</p> <p>○ <u>友だちの跳ぶ姿を見て</u>、「○○君より高く跳びたい。」と挑戦していた。</p> <p>○ 家の人に得意そうにやり方を伝え、一緒にやろうと誘っていた。</p> <p>○ みんなで一緒にはりきって片付けをしていた。</p> | <p>○ 幼児が今まで体験してきている遊び（功技台・ケンステップなど）を取り入れて遊べるように環境を整えた。</p> <p>○ 保護者には、幼児と一緒に遊びを楽しんでもらうと共に、「できたよ！」という幼児の気持ちが満足できるようにしっかりと褒めてもらうようにした。</p> <p>○ 新聞紙を丸めて岩を作り、その間にケンステップを置き、川の岩の間を跳んでいるイメージにした「石跳びの術」、巧技台から跳び下りる際に「ひらり！」と声をかけ、高く跳ぶよう励ました「ひらりの術」などの名前をつけ、楽しい雰囲気盛り上げた。</p> <p>○ それぞれの修行の場所に忍者の修行の絵を描いた表示を置き、動きのイメージが伝わりやすいようにした。</p> <p>○ ケンステップをジグザグに置くことで、左右に跳ぶ動きを楽しめるようにした。また、リズムよく正確に跳んでいる姿を「本物の忍者みたい！」と認め、足を揃えたり腰をひねったりする体の動かし方を試してみたいよう声をかけた。</p> <p>○ 5歳児の頑張っている姿に教師がしっかり共感し、4歳児が刺激を受け、やってみたいと思えるよう援助した。</p> <p>○ はしごくぐりや跳び下りなどの危険が予想される場所には、交代で教師が付き、安全に留意した。また、自分で跳び下りるタイミングを考えられるように、後から来る幼児に待つよう声をかけたり、必要に応じて補助したりするようにした。</p> <p>○ 友だちに刺激を受けながら意欲的に活動している姿を体的に知らせ、保護者にも関心をもってもらうようにした。</p> <p>○ 楽しかった気持ちを受け止めると共に、次への意欲が膨らむように話をした。</p> |

【石跳びの術】



【ひらりの術】



○ 取組から

- ・ この活動では、忍者の絵を貼る・岩や川を作る・修行に名前をつけるなど、環境を工夫することで忍者のイメージを膨らませて遊ぶことができた。なりきって遊ぶことで、失敗を気にせず活動する姿が見られ、体全体を使った動きを自ら試すようになった。
- ・ 巧技台の跳び下りは少しずつ高さをあげ「ドキドキしたけどできた！」という体験を積み重ねた。難易度があがることでより、楽しさが増していた。個々の幼児に合わせて変化をつけ、自分で跳んでみようと思ひ、勇気を出して跳び下りる体験が、自信になり次の意欲につながる大切さを再認識できた。
- ・ 友だちの姿を見ることで刺激を受け、「もっと高く。」「もっと忍者らしく。」跳ぼうとする姿が見られた。

ウ 「投」における指導方法の工夫

○ 「投」における幼児の実態

- ・ 家庭で「投げる」遊びの経験がある幼児は、全身を使って投げるのが自然に身についているが、経験の少ない幼児は、投げ方がわからず、体をうまく使うことができない。
- ・ 体のバランスの取り方や投げるための体の使い方がわからない幼児も見られ、苦手意識をもっている幼児もいる。
- ・ 公園があってもボール遊びが禁止されているなど、思い切りボールを投げる場が少なく、ボール遊びをしている姿を見る機会も少ない。
- ・ 体が硬く、手首や足首を柔軟に動かすことができにくい幼児が見られる。

○ 幼児にとっての「投」とは

- ・ ボールは、幼児にとって自発的に触れてみたい魅力的な用具であり、「投げる」遊びは、何度も投げたり転がしたりして試してみたい気持ちをもつことができる遊びである。
- ・ 「投げる」遊びは、一人で楽しむ遊びから教師や友だちとボールを投げ合ったり、ボールを使って競い合ったりする遊びまで、発達に応じた遊びができる。
- ・ 様々な「投げる」遊びを経験し、用具を自在に扱うことができるようになると、より高く、より遠く、より強く…と「投げる」楽しさを味わうことができる。
- ・ ドッジボールや野球などのルールのある遊びでは、仲間とのつながりを強く感じながら遊ぶことができ、投げ方を考えて試したり、チームで勝つための作戦を考えたりする中で、思考力も養うことができる。

○ 「投げる」ことが好きになるためには

「投げる」動きが、遊びを通して身に付くような環境を工夫し設定することが必要である。ボールなどの用具に慣れ、安全に遊ぶことのできる時間や場の保障をすること、手首や足首を柔らかくしたり、腕力を養ったりできるような「投げる」につながる遊びを意図的に取り入れることで、より「投げる」ことが好きになるのではないかと考える。そして、友だちと一緒に楽しむことのできる環境の工夫や幼児の意欲を引き出す援助を行い、繰り返し何度も楽しんで遊ぶよう援助する中で、「全身が協応する動き」や「体のひねり」を意識しながら、「投げる」時の体の使い方を自然に身に付けられるようにすることが「投げる」ことを好きになることにつながると考える。

幼児の発達段階に応じていろいろな投げ方を経験し、投げる楽しさを味わい、目標を達成するなどの充実感や満足感を味わわせるように援助をすることも必要である。

「投・事例 繰り返し何度も『投げる』」

川の向こうへ投げてみよう！ 4歳児 6月

~~~~~ わかる  
===== できる  
----- かかわり合う

| 幼児の姿                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 環境構成・教師の援助                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>○ 川に見立てて遊んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>川の向こうへボールを投げた。<br/>川の向こうをイメージした言葉のやり取りを楽しんだ。<br/>「川の向こうまで行った！」<br/>「川の中に落っこちたね！」</li> <li>友だちの遊んでいる様子を見てやってみみたい気持ちが高まり真似をして遊び始めた。</li> <li>川があることを意識して遠くへ投げようとしていた。</li> <li>遊具を自分で組み合わせて的を作った。<br/>カラーボックス・カラーコーン</li> <li>キャッチボールをして遊んだ。</li> </ul> | <p>○ 園庭に水色のラインを引くことで、川のイメージをもって遊べるよう、環境を構成した。</p> <p>○ ボールが川の向こうに届かなくても、会話のやり取りを楽しめる雰囲気を大切にした。</p> <p>○ 4歳児でも扱いやすい用具を準備し、投げ方を褒めたり、できたことを喜び合ったりして意欲が増すようにした。</p> <p>○ 繰り返し何度も遊ぶ時間を保障することで、自分なりの目標をもち、満足いくまで投げて遊ぶことが出来るようにした。</p> <p>○ 興味をもちにくい幼児には、友だちのしていることを一緒に見たり、楽しく遊んでいる様子を伝えたりしながら、関心がもてるようにした。</p> <p>○ 身近な遊具を利用したり組み合わせたりできるようにし、投げてみたい気持ちが増すようにした。</p> <p>○ 幼児が工夫している姿を認め、さらに遊びの楽しさを味わえるように言葉掛けをした。</p> <p>○ 川を挟んで教師と一緒にキャッチボールを楽しみ、相手がいることでより遊びが楽しくなるようにした。</p> |

おもしろそうだな。  
やってみよう！



ぼくもやってみよう。あれ〜  
かわにおちちゃうよ〜う！



ぼくのつくったまどに  
あたるかなあ。



- 取組から
- 「川の向こうまで投げる。」という簡単な遊び方にしたことで、「自分にもできそうだな。」という気持ちをもたせることで、幼児はやってみたいと思う気持ちをもつことができ、「できた。」という喜びを味わわせることができた。
  - 何度も繰り返し遊びながら、試したり工夫したりすることで、投げるための体の使い方がわかり、コツをつかんで投げようとする姿が見られた。
  - 投げる経験が積み重ねられるよう、教師自身が「投げる」環境を計画的に取り入れていくことが必要である。
  - 友だちのしている様子を見たり、教師にやり方を教えもらったりすることで、体を動かすことに消極的だった幼児自ら仲間入りし、投げることを楽しむようになった。
  - 教師の声掛けで、的を意識して投げたり、的を自分で構成したりする姿も見られた。4歳児の発達段階に合わせ、イメージを膨らませ見立てて遊べるように身近にある用具を準備することで、遊びへの意欲が増すことが分かった。
  - 友だちと言葉を交わしながら遊ぶことで、楽しさが増す様子が見られた。友だちとかかわって遊びながら投げる経験が繰り返されるようにすることが大切である。



## 4 研究のまとめ

### (1) 成果

- 体を動かして遊ぶことが大好きな幼児を育てるためには、「取り組みやすく繰り返し体験できる環境」や「友だち（教師・家族）と一緒に楽しむことができる環境」を発達段階や幼児の実態に即して工夫し、構成することが大切であるとわかった。また、「走る」「跳ぶ」「投げる」などのいろいろな動きを楽しく経験できるように工夫することが遊びをより面白くし、幼児が喜んで取り組むようになり、効果的であるとわかった。
- 幼児が自発的に思わず体を動かしたくなる活動内容や環境構成について考え、援助の工夫を行ってきたことで、進んで運動遊びを楽しみ、意欲的に活動する幼児の姿が見られた。また、幼児は、教師や周りの幼児との温かい心の触れ合いや交流を通して有能感・満足感・開放感・充実感・達成感などを味わい、更に意欲的に活動していくことがわかった。
- 家庭環境の違いや経験の差から、幼児の体力や、体を動かすことへの興味・関心には個人差が大きいことが再確認できた。実践を通して、幼児が遊びのどこにつまずいているか、どこに楽しさを感じているのかを把握し、励ましや認めなど言葉掛けの工夫や、個々の発達に配慮した援助をしていくことが大切であるとわかった。
- 「走る」「跳ぶ」「投げる」という三つの視点から研究を進める中で、教師は成果を各園に持ち帰り、様々な動きが経験できるような活動内容や環境構成の工夫をしていくことができた。そのことにより、幼児は遊びを楽しみながらいろいろな動きを繰り返し経験することができ、運動遊びに対する意欲の高まりが見られ、体力の向上につながっている。このことは、各園で実施した体力測定の結果（6月・10月実施）にも数量的な変化として現れている。
- 体力づくりプロジェクト研究会で事例研究したことを、各園の実態に応じて実践した。このことは、個人差に応じた配慮や、環境・援助の工夫につながり、教師の資質向上において効果的であった。

### (2) 課題

- 体を動かして遊ぶことが大好きな幼児を育てるため「走る」「跳ぶ」「投げる」など、いろいろな動きが経験ができる遊びを工夫し、環境構成を考えてきた。しかし、その過程で、幼児の興味を持続させていく難しさも感じた。生活全体を通して幼児の思いや願いを的確に把握し、安心して遊ぶことのできる環境を構成し、発達段階に合わせた意欲を高める工夫について引き続き考えていきたい。
- 幼児の育ちを支えるためには、幼稚園だけでなく保護者と連携して取組を進めていくことが大切である。今後も幼児・保護者がともに楽しむことのできる遊びの工夫や場の提供、情報発信など、保護者へのアプローチを更に充実させていきたい。
- 園内の遊びの環境をより充実させるとともに、地域環境を適切に活用し、取組を広げていきたい。
- 今後も、幼児が自発的に体を動かしたくなる環境構成や活動の主体として自己決定できる内容の工夫、友だちと一緒に活動することによりかかわりを育てる環境づくりについて考えていきたい。